

5月26日に行われたCamp Meeting in Japan 2012～第16回日本キャンプ会議への特別講演として、グリーンキャンプのスーパーバイザーを務めていただいている西田正弘さん（東日本大震災中央子ども支援センター アドバイザー）にお話しいただいた内容をまとめました。

## 📦 子どもたちの置かれている状況

東日本大震災では、2,000人を超える子どもたちが親を失いました。さらに家族の死、友人の死、地域の人の死を経験し、目撃しています。家や写真などの思い出も失っています。また、親戚の家などに預けられ、今まで生活してきたコミュニティから切り離されているケースも多くあります。そんな状況の中、退行や暴力、「ぼくは死体を踏んづけちゃったんだ!」といったグロテスクな話をするといったことが見られるそうです。子どもたちがこれだけ多くの方が亡くなった姿を目撃したのは第二次世界大戦以来と言えますから、それだけショックが大きかったということだろうと思います。

グリーンは「死別などによる深い悲しみ・悲嘆・苦悩・嘆き」を指すことばです。グリーフの反応はごく自然なものです、一人ひとり違うものでもあります。たとえば、引きこもったり、ストレスの発散方法がわからなくて暴力的になったりする子もいます。思春期の場合、生きていることに意味があるのかという大きな疑問を抱えることもあります。それは、信じていたものが信じられなくなる、土台が崩れちゃうような感覚です。「なんで自分を置いて行ってしまったんだ」と怒りに似た感情を持つ子もいますが、やはりそれも自然なことなのです。今回の震災では、親族里親がほとんどですが、小学生の子が60代、70代の祖父母と暮らしているケースも多く、「おじいちゃんは、自分が大人になるまで元気なのか?」という不安を抱える子もいます。



グリーンは自然な反応ですから、通常、時間がたてば気持ちの置き所が見つかるものですが、そのプロセスがうまくいかないと、複雑化する場合があります。今回のような予期しない突然の死は複

雑化の要因になりやすいのですが、さらに子どもの場合は、面倒を見る大人の状況に大きく左右されます。ですから、子どもを支える大人をどう支えるかということも同時に大事です。

また、兄弟を亡くし、あまりに親が嘆き悲しむので、「ぼくがお兄ちゃんの代わりになってあげるよ」と言ったりする子もいます。そうすると、自分は誰なのかというアイデンティティの確立が難しくなり、自分らしくいられないということも起こりえます。

時間がたってショック期のダメージは徐々に減ってきますが、それと同時に亡くした人の存在の大きさに打ちのめされるということも起こってきます。報道の影響も大きくて、3月になるたびに津波の映像が流れて、それを見ることで新たなダメージを受ける子も出てくるかもしれません。また、震災以降「いい子」にしている子がたくさんいます。「この子は大丈夫だ」と思ってしまいがちですが、時間がたってエネルギーが落ちてきたときに、変調をきたすという子も出てくるでしょう。

## 📦 遺された子どもに必要なこと

では、そのような子どもに対してどうすればいいのでしょうか? まずは一般論として、ウォーデンという人がまとめた「遺された子どもに必要なこと」を見ていきましょう。

- ・自分がしっかりと世話してもらえるとわかる必要がある
- ・自分のせいで親を死なせたのではないとわかる必要がある
- ・死に関する明瞭な情報を必要としている
- ・自分も葬送儀礼の大切な一員だと感じられる必要がある
- ・日常生活や日課を続ける必要がある
- ・自分の疑問にしっかりと耳を傾けてくれる人を必要としている
- ・亡くなった親を思い起こす手だてを必要としている

子どもは死を理解できないからと、「考えなくてもいい」と言われると、子どもは「この人に言ってもだめだ」と思ってしまいます。また、「忘れなさい」と言われている子もいますが、それでも気持ちの中で落ち着かないものが残ります。子どもは成長とともにさまざまな課題にぶつかりますが、そのときにモデルが必要ですね。両親というのは重要なモデルですから、たとえ実在しなくても、どんな気持ちで自分の名前を付けたとか、どんな人だったのかといったことを伝えることによって、親のイメージを作ることができます。突然に親を亡くす経験をする、死に様に気を取られがちですが、親の人生、生き様をしっかりと記憶の中に残していくことが、大きな力になると思います。

そして、子どもたちが安心安全の場所で遊びなどを通じて表現

# 「グリーン(ワーク)×キャンプ」にできること

## 5月26日・Camp Meeting in Japan 2012 特別講演抄録

し、自分の気持ちを抑え込まずに外に出すという経験をして、それでいいだと学ぶことも必要だと思います。また、奨学金などの情報を知ることを通じて、「進学できるんだ」と気づくことも大切です。そのプロセスを支えるのが「あのね…」と声をかけられる大人の存在です。「この人になら言ってもいい」という人間関係を作ることが重要です。たくさんの大人が子どもを見守って、「あのね」という言葉に耳を傾けることが必要だと思います。子どもは庇護の対象ではありますが、当事者でもあります。当事者の子どもたちが「こんなふうにできたらいいのにな」と思うニーズに応じてあげられる人や場所が必要だろうと思います。子どもの自尊心を損なわないように、「ぼくはぼくでいいんだ」と感じられる関係性をどう作るかを考えたいものです。



「あのね…」「なあに？」

グリーンは特別なものではなく、病気でもないけれど、手強いものです。けれど、話ができる人に出会えるとスッキリします。ダメージが大きいとリカバリーに力を取られて、前向きなことに力を配分できないものですから、ダメージを少しずつ軽減できる場所があることが大切なのです。そして、「クラブがんばるよ」「勉強がんばってみる」と言って卒業するのが、よいあり方だと思います。おっかなびっくりで一步を踏み出してみると、出会いがあって、話したり、遊んだりして、発散してうちに帰ることができます。そして、少しスッキリした気持ちで自分のやりたいことをしてもらえるといいなと思います。

### 台湾でのキャンプを経て

キャンプも同じような大きな力を持っている場所です。いっしょに遊んでいると、自然に話しやすくなってきますから、キャンプはぴったりだと思います。

3月には両親を亡くした子どもたち10人と台湾へキャンプに行ってきました。参加した10人のうち男の子は3人で、女の子が7

人。女の子は積極的ですね。この10人を3つのグループに分けて、各グループでプログラムを選べるようにしてありました。山登りやクラフトなどをグループでやったり、グループ単位で夜市に出かけたりしました。

キャンプ中、小さい女の子のグループが「お化け屋敷」をやっていましたが、今までの私の経験でも、お化け屋敷は子どもたちにとって大事なイベントのようです。8歳と9歳のちょうど死を理解できるようになる年代の女の子だったので、それが関係しているのかもしれない。お化け屋敷という遊びにすることで、死に触れやす



「お化け屋敷をやります。みんな来てください!」

くする環境のひとつになっているのかなと思います。

被災地では最近、お化けの話がよく出ているそうです。人の気配を感じたら「もしかしたら、お母さんかも…」など思うのかもしれない。徐々にダメージが薄くなって、思慕が強まっているということもあるかもしれません。もしかしたら、みなさんもお化けがいたという話を聞かされることがあるかもしれませんが、子どもたちは「聞いてくれる人」を選んで話している可能性があります。ですから、理解者として選ばれたのだと思って、聞いてもらえればと思います。

「ねえ、死ぬんだったら誰とがいい?ひとりじゃ、やだな」

「うん、ひとはやだね」

「でも、お母さん、もういないんだよね」

キャンプ中にはこんな会話も交わされました。子どもたちにとっては、このような思いをシェアできる関係を持てるというのが、大事なのだと思います。

キャンプは、子どもでいられる時間であり、一人じゃないと感じられる空間であり、家族以外にも見守ってくれる人がいるということ実感し、遊びながらチャレンジして、自分の気持ちにいい触れることができる体験なのだと思います。ぜひ、みなさんの力を借りて続けていければと思います。